

映画の小箱

光あふれるフロリダ。
ちょっとヘンな家庭を通して、
家族愛とは何かを
笑いの中に描き出す

『バードケージ』
本当の家族って
何だろう？

金丸弘美=文
text by Hiromi Kamemaru
坂本 照=写真
photograph by Akira Sakamoto

白く輝く雲からやがて、銀色の波が見え、その波の上を滑るように近づくと、波の先の陸の向こうから軽快な音楽が聞こえてくる。

「トあたしたちはファミリリー。固い絆で結ばれているファミリリー」

波を越えると、原色のきらびやかなファミリオンに身をまとった、さまざまな人々を乗せた車が行き交う賑やかな道路となり、そして、まるで金色に輝くお城のような建物が見えてくる。そこが、楽しい音楽がきこえてくる場所、フロリダ州サウスビーチにあるナイトクラブ「バードケージ」だ。

クラブの客は、一人のスターが登場するのを待っている。その名は、アルバート（ネイサン・レイン）だ。ところが、彼（彼女？）は、部屋にこもったまま。というのも、クラブの経営者兼演出家でアルバートの同棲の相手アーマンド・ゴールドマン（ロビン・ウィリアムズ）に、若い恋人ができたと疑って嫉妬に身悶えしているからなのだ。困ったアーマンドは、アルバートが舞台に出ないと、別のダンサーを主役にする脅して、ようやく彼女（？）を舞台へ出した。

さて、アルバートの嫉妬の相手とは、実は、アーマンドが若い頃、キャサリン（クリステ

イン・バランスキ）との間にできた息子ウアルだった。彼が結婚の相談に訪れるので、落ち着かない時を過ごしていたのである。アルバートは、ほっと胸をなで下ろし、ウアルのことを歓迎することになった。

ところが、ここから、奇妙なファミリリーの物語が始まるのである。ウアルの恋人バーバラの父親は、キリー上院議員（ジーン・ハックマン）で超タカ派、しかも道徳協会の副会長。ウアルは、恋人とその両親が自分の親に挨拶にくるとあって、父親がゲイ・クラブの経営者で、しかも男性と夫婦とあっては、まずいと考えたのだ。

ウアルの要求は、まず派手な装飾のある部屋を急ぎよ改装して、アルバートにしばらくどこかへ行ってもらいたいということだ。

アーマンドの憂鬱、アルバートの悲嘆ぶりは、いまいちもない。自分たちの実の息子に生活を変えろと言われるのだから。

アーマンドは、アルバートの嘆きをかわし、ウイルの要求をかなえるために、アルバートを叔父ということにし、いつもは女らしい（アルバートに男らしさの特訓を行う。トロピカルなオープンスタイルのラウンジで、男らしい歩き方、話し方、はては小指をたてずに、トリストにバターを塗る方法という、涙ぐま



しい訓練が始まった。

一方、キリー上院議員は、娘の結婚には大反対。そんな折り、道徳協会の会長が未成年の黒人女性とベッドを共にし、あろうことか腹上死したというのである。副会長のキリーは、マスコミの恰好の餌食になる。キリーの妻ルイーズ(タイアン・ウィースト)は、マスコミの話題をそらすためにも、娘の結婚式を早く挙げるべきだと主張。こうして夫婦はアーマンドの家に向かうことになった。

さて、ヴァルは本当の母を一時呼び戻し、バーバラの両親が来るときだけ、よりを戻してもらおうことにする。アーマンドも承知する。こうして準備は整ったかみえたが、キリー夫妻が、アーマンドの家に現れたとき、本当の母キヤサリンは渋滞に巻き込まれ到着しない。そこに、男になれず(?) 開き直ったアルバートがなんと女装して母として現れたのだ。奇妙な両親のご対面が始まる。ところが、キリー上院議員は忌憚らない意見を述

べるヴァルの母アルバートを絶賛。たちまち意気投合してしまう。

それぞれにだまされたまされての、筆舌に尽くしがたい、家族ゲームが展開される。

世間体を気にする若者ヴァル、本音で生きようとするアルバート、優しさに満ちたアーマンド、キャリアにこだわるキリー、肩書とマスコミを気にするルイーズ、純粹な愛を信じるバーバラ。それぞれが世間や体裁を気にして葛藤するうちに、ゲイのアルバートの本音で語る姿勢に次第に巻き込まれ、自分たちの信じるものを信じるというハートに迫る展開になるのが素晴らしい。

トロピカルなサウスビーチのファッションや情景の楽しさ、シヨに登場するダンサーの達者さ、さらにウェテランの役者の丁々発止ぶりは見事。おかしくて哀しくて温かくてほほえましくて、それでいてスリリングで、笑いも絶えない。極上のシャンパンを飲むようなエンターテインメント劇だ。

『バードケージ』

(米・UIP) The birdcage 1996年

監督=マイク・ニコルズ

出演=ロビン・ウィリアムズ/ジーン・ハックマン

ネイサン・レイン/ダイアン・ウィースト

ダン・ファターマン/カリスタ・フロックハート

/ハンク・アザリア

(UIP配給) 12月下旬より、丸の内ルーブルほか

全国松竹、東急系にて上映